

十二月

僕は絵を見ている。展覧会に来るのは久しぶりだった。絵画にそれほど興味があるわけではないが、いつもお世話になつてゐる先生からチケットをもらつてしまつたため、行つて感想ぐらいは伝えないと不誠実だろう。

不勉強な僕は知らなかつたが、オーストリア出身のそこそこ有名な画家らしい。その画家の日本で初めての回顧展とあつて、会場は想像していたよりも混雑していた。抽象的な作品ばかりで、どれも僕には理解がたい。

人が集つてゐる作品がいくつかあるが、きつと有名な絵なのだろう。ひよいと背伸びして作品を見る。ふむ、これが素晴らしい作品か。

人混みを抜け、落ち着いた場所へ移動する。そこにある作品たちは、先ほどまでのものとは少し毛色が違つてゐた。デッサンやスケッチなど、習作らしいものが展示されてゐる。どうやら、画家の学生時代から修行時代に描かれた作品がまとめられてゐる場所だった。

抽象画家のルーツを探るうえで、若い時の作品や具象的なものを描いてゐる作品を知ることが大切なんだろう。僕にはこちらの方が分かりやすく好きだ。

その中にひとつ、人物画があつた。《私は砂漠の夢を見ない》という変わったタイトルで、大きくて黒い瞳が印象的な女性の半身像だった。ポーズはあの有名な女性像、《モナ・リザ》に影響を受けてゐるのか、身体を傾けて座つており、薄く微笑んでゐる。

僕は彼女を一目見た瞬間、どうかしてしまつた。彼女を構成している筆跡を一つひとつ目でなぞり、立ち尽く

してゐた。絵画の情報パネルには、この作品のタイトルと制作年、使われた画材しか書かれておらず、この少女のモデルについては分からなかつた。帰る前にスマホで軽く調べてみても、それ以上の情報は出てこなかつた。

ただ、画家が描いた人物画として残されているのはこの一作品だけで、かつて研究者たちに議論をよんだこともあつたそうだった。僕は久方ぶりに図書館へ通つた。

それから一月後、パソコンの前に座り、猛然と字を打ち始めた僕がいる。

「七月」

僕はね、よく同じ夢を見るんだ。子どものときからずっと。どんな夢かつて？ 聞いてもつまらないと思うけれど、君なら解釈してくれるかもしれないね、マリアンヌ。寝しなの物語としてはふさわしいだろう。

僕は砂漠にいるんだ。夜、月が出てゐる。遮るものは何もなく、ただ、風のみが時折うなつてゐる。

その夢はとて静かで、必ずしも何かが起こるといふわけではないのだが、僕の心をひどく揺さぶる。

おかしいだろう。僕は砂漠になつて行つたことはなく、もちろんそんな光景を見たこともない。なぜこんな夢を見るのか、考えてみても理由はわからない。もしかしたら、僕の遠い祖先に旅人がいたのかもしれない。とにかく、夢の中の僕はひたすら何かを探してゐるんだ。あてもなく砂漠を歩き回つてゐることもあれば、地面に跪いて砂を掻き分けてゐるときもある。どれだけ歩いててもオアシスは見つからないし、どんなに手を傷つけても掻き分けた砂が再び穴をふさぐ。それはかつてシーシユボスが課されたような、紛れもない苦行だ。決して報われる

ことはない。しかしいつも、確信があるんだ。あと一歩、あと一掻き進んでいけば、僕は「何か」見つけれられる。その答えが何であるか認める前に、僕は目を覚ましてしまふ。目を覚ましたとき僕は、見つけれなかつた喪失感と、再びあの夢を見ることができるといふ安堵がないまぜになつてゐる。いい年してこんなことで心乱されるとは恥ずかしいんだが、君だつたらこんな話でも、素敵な歌に昇華してくれるだろう？

……おや、眠つてしまつたのかい。

おやすみなさい、良い夢を。

私は今、砂を見ている。

きつかけはそう、十日前に別れた男の夢物語だ。優男みたいな風貌のくせして、その実ドン・ジュアンも真つ青な遊び人。気障つたらしい言い回しでつまらないことを言う、タイクツな人だった。でも、最後に少し興味深いことを言つてゐた。微睡ながら聞いていたから、詳細は覚えていないけれど、砂漠の話をしてゐた気がする。

いえ、本当は夢の話だつたけれど、私が惹かれたのは砂漠について。彼と違つて、私の中にはほんとうに旅人の血が流れてゐる。太陽の光を吸い込むような漆黒の髪と瞳がその証拠。

そのせいだろうか、久方ぶりに見た砂漠は私の心を波立たせてゐる。砂漠は私を誘つてゐた。彼が見つけれなかつたものをきつと私には開いて見せてくれる、そんな確信があつた。

久しぶりにいい曲が書けそう。

しかし私はこの旅が終わつた後、ちゃんとこれまでの

ように地に足ついた生活に戻れるのだろうか。果てのない地平線に大いなる期待と一抹の不安を見出し、私はそっと息をついた。

「二月」

ラジオから異国の音楽が流れてきます。曲調は私にとって馴染みの薄いものだったけれど、その歌詞は私たちの営みを描いているようです。つまり、オアシスの女たちについてです。

曲が終わってからも、さっきの歌が頭から離れません。気が付くと何をしているときもハミングしていました。

そんな私の様子を見て、母は笑っています。まるで歌姫ね、と。私は頬を赤らめてしまいました。

母はからかって言ったんでしょけれど、ああ、歌姫とはなんといい響きなのかしら！ 今度は、そればっかりが私の頭を占めています。

歌姫というからには都会の大きな劇場のステージで、大勢の観客の前で歌うのでしょうか。

この街は通過する旅人や隊商を癒すための場所です。簡易的なステージはあれど、多くの人はきくと、次の街に着く頃には私の歌を忘れてしまいます。砂漠の風はあらゆるものをとどめ置かないでしょうから。

この街では歌姫になるのは無理でしょう。暮らして悪くなく、私たちの先祖たちから代々伝わっている風習も私はとても誇らしいと思っています。何も不自由はありません。しかし、私の夢を叶えることだけはできそうにありません。街を出るしかないのです。

私の信じる者は、このような願いを許してください。外でしようか。いえ、きつと許してください。外

へ出ても寛大なその御心のそばに、私はずっとありたいと思っています。

私はこっそりと荷造りを始めました。

「十月」

僕はキャンバスを抱えて歩いていた。大きくて重い袋、持って歩いていると十月だというのに汗が出るほどだ。そのうえこの辺りは観光客も多く、歩きづらい。

一度持ち替えようと歌劇場の前、広場の端で荷物を下ろした。一息ついていると、目の前に影が差した。

「チケットを買ってはいませんか」

片言のドイツ語で話しかけてきた人は、綺麗な瞳を持つ女性だった。ベールを被っていて、外国から来た人の方である。僕が驚いて、彼女の顔をまじまじと見つめていると、彼女は再び「チケットを買ってはいませんか」と繰り返した。

僕は咄嗟に頷いてしまい、慌てて札をポケットから取り出す。彼女はそれを受け取ると、足りない、と一言こぼした。困った、それ以上はさすがに出せない。

学生なんだ、と伝えると彼女は分かっていたわ、と言って僕にチケットを渡してくれた。そして僕にもう用はないとばかりにあっさりどこかへ行ってしまった。きつと別の客にチケットを売りつけに行ったのだろうか。

夜、荷物を置いてから再び街へ出る。大した服はないので、唯一持っているジャケットに袖を通した。歌劇場の前で客引きしているコンサートは、大抵音楽大の学生たちが演奏しているような観光客向けのものなので、カジュアルな恰好で行っても全然構わないだろうけれど、

一応ね。

入口は細い路地に面していて、分かりにくかったがなんとか開演前に見つけられた。小さい会場のわりに、それなりに人が入っていた。僕の予想通り、そのほとんどが観光客だったけれども。

ピアノソロ、弦楽四重奏、テノール歌手と順に登場し、コンサートはつつがなく進行された。オーストラリア出身の音楽家を中心に、有名な作曲家の有名な歌曲が脈絡なく演奏されている。音楽それ自体を鑑賞するというより、この街で音楽を聴いているというシチュエーションを楽しむような感じだ。

男性歌手が袖にはけた後、登場してきたのはチケットを売っていた女性だった。恐らく楽団員だとは思っていたが、ソプラノとは驚いた。先ほどとは異なり、ベールは被っておらず彼女の豊かな黒い髪が見えた。ドレスは高いものではないだろうが、控えめな装飾で彼女の趣味の良さが伺え、とてもよく似合っている。

しかし、彼女はこれから歌うというのにその表情は暗かった。そのままピアノ演奏が始まり、彼女は歌い始めていた。曲はモーツァルトの《すみれ》だった。しっとりとしているけれど、ところどころ軽やかに跳ねる伴奏に合わせ、彼女は歌い上げた。歌い始めてからもその表情は明るくならず、時折苦し気に眉を寄せていた。音が出ないわけではないだろう。欲目かもしれないが、彼女の歌声は素晴らしかった。その証拠に短い曲が終わったあと、観客は今日一番の拍手を彼女に送っていた。

彼女はお辞儀をすると客席の方はほとんど見ずに舞台裏へ姿を消した。その後、出演者が全員登場して合奏するときも彼女は出てこず、別の女性がソプラノを歌っていた。

それから暫く。僕は何度か彼女の姿を歌劇場前で探し

ていた。そこは人も多く到底見つけられそうになかった
ので、僕は再びコンサート会場を訪れた。楽団は相変わ
らず観光客相手に演奏をしていたけれど、彼女の姿は見
えなかった。帰りがけ、それとなく楽団員に彼女の行方
を聞いてみたけれど、小楽団では人の入れ替わりが激し
く彼女がどこへ行ったかは分からないそうだ。

僕は落胆しつつ、寮へ戻った。最近はず教授や制作に力
が入っていないことを教授に目ざとく見つけられ、追加
の課題を出されてしまった。それを早く片付けてしまわ
なければ。ふと、部屋の隅に立て掛けられたキャンバス
を見た。習作として果物を題材にした静物画が描かれて
いる。彼女に声をかけられたときに運んでいたものだ。

僕はなぜ、こんなにも彼女が僕の心に住み着いている
のか考えた。名前すら知らないのに。この執着は恋では
ないと考えている。一目で見惚れてしまったけれど、そ
れ以上に彼女の漆黒の瞳や、苦悶の表情が何を見ていた
のかが知りたかった。

僕はこの執着に蹴りをつけるため、キャンバスを手
取った。そして、色とりどりの果物の絵を濃茶の絵の具
でつぶし、想像した彼女の微笑みを描き始めた。

二月

僕はパソコンの中の文字列を見ていた。

僕の激情のままに書き連ねた作品は、一応結末にたど
り着いた。細かな修正はまだ必要だろうが、今は達成感
で僕の心は満たされていた。

完成したら、先生に見せる約束だった。先生は僕が展
覧会を気に入ったことをとても喜んでくれた。そして、
久しぶりに小説を書く気になったことも。

僕は想像する。語りが曲になり、歌になり、そして絵
になることを。僕はその続きを創造するだけだ。

僕は語り手が見つけられなかった宝物を見つけ、旅人
が辿り着けなかった終着点へ行き、彼女が見なかった砂
漠の夢を見るだろう。そして画家が二度と会えなかつた
人に再び巡り合うのだ。